環境行動論・環境心理学　　2007.4.11

講義計画

1.概要

本講義の目標は，環境問題に対する社会心理学や環境心理学からのアプローチを理解することである．地域からグローバルなレベルまでの多様な環境問題を，個人あるいは集団はどのように認識し，評価し，行動しているのかについての基本的研究や理論を取り上げる．さらに，環境保全に対して，心理学はどのような貢献ができるのかについても考える．

1-1.研究の対象

環境にかんする心理学的研究は，人間と環境との相互依存のなかで生じるさまざまな環境問題を研究対象として，さまざまな研究方法でアプローチしている．環境問題の全ての事例をこの講義において詳しく紹介することはできないので，ここでは，地域レベルの環境問題（ゴミ問題とリサイクル，渇水，生活排水汚染，省エネルギー，公共交通など）の事例を中心にとりあげる．これらの問題は，不特定多数の住民による消費行動が環境に対して何らかのインパクトを与え，また，それによる環境の質の低下が住民にネガティブな影響を与えるという共通の特性をもっている．つまり，個人の消費・廃棄がもたらす個人的便益と環境汚染という社会的費用の対立という，社会的ジレンマ的構造を有している．

1-2.研究方法

このような環境問題にたいする心理学の研究アプローチは，大きく３つに分けることができる．１つは，社会調査などによって，環境問題についての人々の態度・認知の構造を明らかにしようとする理論的研究である，特にさまざまなアプローチ（社会的ジレンマ，環境リスク，愛他行動，合理的行為などの理論）により環境配慮あるいは環境保全行動の規定因を理解しようとする研究．２つには，野外実験などによって，環境保全・配慮行動を促進するための応用的研究である，特に環境配慮行動を規定する認知・態度・行動意図などを変容するための効果的な方法を解明する研究．３つには，環境の現場での具体的問題を解決するために，行政やＮＰＯが導入した新しい制度や社会実験やアクションリサーチによって，住民や消費者の認知や行動が変容したかどうかを評価する実践的研究である．それぞれのアプローチによる代表的な研究を紹介しながら，その研究方法の特徴や問題点を明らかにすることを目指している．